

紅霞後宮物語

雪村花菜



富士見L文庫



あとがき

268

紅霞後宮物語

5

目次



七日ほど前に会ったばかりなのに、それでいて懐かしい顔が関小玉の目前にあった。

そう思っていることを口に出したら、顔の持ち主に「どっちだよ」と言われるだろうか。それとも「そうだな」と頷かれるだろうか。

ずっと彼の「立場」には会っていたが、彼という「人間」には会っていなかった。それは彼にとっても同じはずだ。

文林。

彼の個人名を口に出さなくなつて、もう三年が経つのだ。

三年かあ、と妙な感慨が胸に満ちる。意外な長さ、その間、思ったより自分が変わつていないことに気づいて。

あのとき「行き遅れ」と言われていた自分は、本日も行き遅れのまま三十三歳を迎えている。それもこれもこの男がもたらしてくれたなかつたせいだ……というのは半分冗談だ。そして半分は本当。あの日まで、自分はいつかこの男とくっつくだろうなという予感を持っていた。それは一方通行なものではないという感じも。

だが、それはこの男が皇帝になった瞬間から、過去の話になつたのだ。

「以前のような言葉遣いで構わない。お前がいつ噛むかはらはらして仕方がない」

「……どうも」

久々に会ってしよっぱなからそれかと思わないでもないが、ありがたい言葉ではある。小玉はぼりぼりと頭を掻き……その手がふと止まる。そういうえは言っておきたいことがあった。

「子ども生まれて、おめでとう」

この男は今、二人の子の父親であるはずだった。個人的に祝いの言葉を伝えることはできないだろうと諦めていたから、この機会に言っておく。

「ああ、どうも」

対する彼の態度は、ちよつと会話の接ぎ穂に困る素っ気なさだ。

「一番上のは、今二歳になるちよつと前か。可愛い盛りだね」

「まあ、それなりに」

やっぱり素っ気ない。こいつ、自分からここ——いかにもお忍びに使われますというような場末の居酒屋——に呼び出しておいて、会話放棄するとかどういう見なんだろう。

あ、そういえば。

「あー……子どもの名前なんだっけ」

「皇子の名前から覚えておけ！」

一喝された。もつともなことなので、話を変えることにした。

「それで、いったいなんでわざわざ皇帝陛下のお出ましなの」

その言葉に皇帝が身にまとう空気がすつと変わった。皇帝が居住まいを正して小玉の目を見る。なんなの。

「頼みがある」

固い声に、自然に小玉の顔も引き締まる。

「なに」

その声のまま、言われた。

「後宮に入ってくれ」

かつてくつつくだろうなと思っていた相手からの、求婚の言葉。そう言っても過言ではない。それなのに、自分でも不思議なくらい、その言葉に心が動かなかった。よい意味でも、悪い意味でも。

それでも、さすがに自分は体でものを考える職業なんだなあと後々感動するほどに、小玉の体は小玉にとって最適の行動をとった。

「へえ、そう」

つまり、一瞬もためらわずに、目の前の男の顔に酒杯の中身をぶちまけたのだ。

「おおおおい！」

なんの因果か同席していた不幸な上官の、叱責混じりの悲鳴を無視して、ひよいと杯を後ろに投げる。からんという音をたてて床に転がるとほぼ同時に、相手の胸ぐらをひつつかんだ。そして笑いながら言う。

「ちよつとは頭冷えた？」

「俺が……」

皇帝も真つ向から小玉を見据えた。

「俺が、ふざけてこんなことを言うと思うか」

「本気なら、なおさら悪いわ」

皇帝は目をそらさない。

「お前の助けが欲しいんだ」

「後宮に？　どんな？」

自慢ではないが、小玉が持っているのは武官としての才能だけだ。そしてそれは、普通は妃嬪に必要とされるものではない。それを知らないわけでもないであろう皇帝は、ここで小玉がまったく予想していなかったことを言い出した。

「お前は今のままではこれ以上出世できない」

「だから？」

小玉はふんと鼻を鳴らした。平民の中でも卑賤といわれる階級の出である彼女が、この若さで將軍になったこと自体がそもそも異例だったのだ。これ以上を望むどころか、そもそもこれまでの出世を望んだこともない。今彼女がこの場にいるのは、十五歳のときになりゆきで徴兵に応じ、がむしゃらに働いたからだ。仕事にやりがいを感じているが、最初はただ死にたくないから頑張り、その後は自分の責任を果たすために頑張ってきた。それがたまたま出世に結びついただけだ。

「それでは困る」

しかし皇帝の言い分は次のようなものだった。今の地位のままでは小玉は力を存分に発揮することができない。それは帝国にとって大きな損失である。この三年間、皇帝は彼女を取り立てようと力を尽くしていたのだが、それは数年でどうにかできる問題ではなかった。

「だから、妃きさきになつてくれ」

この国では皇后をはじめ妃嬪が兵を率いた前例がある。それも高位のものとなれば、皇帝の委任により、禁軍と呼ばれる皇帝直属の親衛隊すらも動かすこともできるのだ。強引ではあるが、それは確かに手っ取り早い方法ではあった。それは素直に認める……それでも。

十年間だ。彼が即位する前は十年間軍人として共に走ってきた仲間だった。最もお互い

を知り尽くしていた相手だった。それが自分の意志を手ひどい形で裏切った。いや、裏切りとはいえない。彼は皇帝だ。国家と臣民を守るために、使えるものを最大限活用しなくてはならない。それはもはや義務とさえいえる。ましてや小玉はすでに武官として皇帝に仕えている身だ。皇帝の人事に口を挟むことなどしていいはずもない。

「そっか……あんたは『皇帝』になったんだもんね」

「……ああ」

それを責めることはできない。そこまで自分勝手にはなれない。

「……せめて相談が欲しかったわ」

許しとほんのちよつとの非難。それが込められた小玉の言葉に、皇帝は深々と頭を下げた。

「すまない」

そんな彼からふいと視線をそらし、小玉はほのかに光る灯火を見つめた。なんとはなしに思う。

——三年って、本当に長い時間なんだな。

少なくとも、人によっては変わるのに十分すぎるほどの時間なのだ。

※

そんな夢を見た。腕組みをして、胸中でその内容を反芻する——猛烈に嫌な夢だった。寝台から出ずに、あの日、ため息をついた自分を一年経った今思い返してみる。

あの頃の自分はそうとう感傷的になっていた。今過去に戻る事ができるのなら、自分の俸禄ほうりくの一年分くらいまでなら出す準備がある。そしてあの時間に戻って、自分をぶんなぐり、ついでに皇帝に酒がめを投げつけて、なんとしてでもこんな話は止めさせるのだ。一年前の自分も、積極的に「あ、今の話ナシね」と言ってくれるだろう。

だって、まさか皇后になるだなんて、聞いてない。

後宮入りを納得したことについて、いまさら往生際悪く決定を翻すつもりはない。しかしあの時点では、兵を率いる資格をぎりぎり持つ程度の階級の妃嬪になるとしか考えていなかったのだ。大勢いる妃嬪の中に、なんか一人異色なのがいるなーくらいの状態なら、まだ許容範囲だった。それがずんどこ位を上げて、今やこの国で最も高貴な女性になってしまった。客観的に考えると笑えるが、主観的に考えると真顔にならざるをえない。この

事態、誰のせいかといえは、もちろん全部皇帝のせいだ。

そう考えると今からでも遅くはない。もちろん後宮入りのお断りのほうは手遅れだが、酒がめは今だつて投げつけられる。そしてそれを実行するかどうかはともかく、とりあえず起きよう。

すると寝台から出た。そして、こきり、と首を回しながら寝室から出ようとし……足下に目をやって、思わず静止した。

しばし沈黙した後、小玉はふと顔を上げた。今日は晴天らしい。

日差し差し込む爽やかな朝、起きて早々に豚の生首と目が合うというのは、けっこう刺激的なことだ。

この世に生を受けて三十四年。生まれて初めてそのことを知った小玉は、とりあえず頭をぼりぼりとかいた。ここ数年、切る機会がなかった髪が、手の中でかき乱される。

しかし、最初の軽い衝撃が去ると、意外に驚くほどのことではなかったような気もしてくる。自分の幼い頃を思い返してみると、意外にこういうことはあったからだ。実家が貧乏だったので、狭い家の中、母が絞め殺した鶏とか、自分が石ぶん投げて狩った鬼とかが、寝ている真横にぶら下がっているというものはざらだった。起きた直後にそれを見てなにを思ったかまでは覚えていないが、多分当時の自分が寝起きにそれを見たならば、抱く感情は「今日はごちそうだ」というときめきのはずだった。

「……うん」

かがみ込んで豚の頭をのぞき込んでみる。意外にきれいな目をしている……つまり新鮮ということだ。小玉はおごそかに手を伸ばしかけたところで、ふと気づいて腕まくりをした——服を汚したくはない——再度ゆっくりと豚の両方の頬に手をかける。

そして生首を持ち上げる。けっこう重い、ということ。

ちょうどその時扉が開き、年配の女性が入ってきた。小玉の思考は中断を余儀なくされる。

「娘子」

うやうやしく目を伏せた女性は、皇后に対する尊称で小玉に呼びかける。「娘子」とは、女性全般への呼びかけだが、ことこの国の後宮に関しては、皇后に対して使われる。

「お目覚めでございますか。ただいまお顔を洗う水をお持ち……」

言いながら彼女は顔を上げ、小玉を見る。豚の生首を手にした寝間着姿の小玉を。

一瞬の空白の後、建物の外にまで絶叫が響いた。

「本当にもう、なんということでしょう。畏れ多くも娘子の宮でこのよう……このよう……明日には大事な行事も控えているというのに……」

寢室前に転がった豚の頭で成否が左右される行事ってどんなだろう、という疑問が浮かぶ。だがその一言に百言は返ってきそうなので、小玉は黙って身支度を調えられるのにかせていた。

周囲には一気に慌ただしくなった宮の喧噪。そして目前には宮の警備責任者の平身低頭。爽やかな朝、起きて早々に豚の生首と目が合うのは確かに珍しいことではないかもしれない。しかし、少なくともそれは、後宮の、皇后の住む紅霞宮の、他ならぬ皇后その人の寢室の前でなければの話である。ましてや、早朝に豚の生首を持つ皇后の姿はなおさら珍しいのだが、それはともかくとして、今朝発生したこの事件は、宮の人間にとって一大事であった。豚の生首だから一大事というわけではもちろんなく、皇后の寢室近くまで不審者の侵入を許したということが問題なのである。

「申し開きのしようもございません。かくなる上は……」

「腹を切るのは後任を決めてからにしないさい！」

陳謝する責任者に、さきほど悲鳴を上げた女官の梅花が一喝する。さきほどの絶叫で、人生のすべての声を振り絞ったかのような声量を発揮したにもかかわらず、声のはりが失われないことから、ただものではないことがうかがえる。責任者がまだ言い終わっていないのに、腹を切るとさりげなく決めつけていることから。

「待って。腹は切らなくていいから」

さすがに小玉が止めに入ると、梅花はきつと小玉をにらみつけた。

「なにをおっしゃいますか娘子！ この者はあるうことか娘子のお命を危険にさらしたのですよ。これは一族郎党の命をもつてもあがなえない罪です！」

「まったくです！」

命がかかっている当事者まで頷くので、釈然としない。今助けようとしていたんだが。

「でも、命の危機は感じなかったわよ」

「ですから……」

眉をひそめて、いさめようとする梅花は、次の小玉の言葉で絶句した。

「……そそやってて、ばればれだった上に、殺気もなかったし」

その言葉に、梅花と責任者以外の者も全員静止した。妙な沈黙がその部屋を支配する。ややあって、梅花が、まるで幼子に「ちよっとおばさんに聞かせてくれない？」というような笑みを、ふっと顔に浮かべた。

「……もしかして、気づいていらっしやったのですか？」

「うん」

「……なぜそこで声をお上げにならなかったのです？」

「いや、なんか仕事してるのかなーって思ってた。邪魔したらいけないなって」
 昨晚、小玉は寢室の前でなにやら人の気配を感じて目が覚めた。これでも武官なのだからそういう面ではかなり敏感なつもりだ。だが今言ったとおり、別に殺気もなければ、気配を殺す様子もあまりなく、「あ、これはなんかうちの連中が仕事してるな」と思って、再び眠りについたのである。これまた武官の特性上、劣悪な環境でも眠れる時にはしっかりと眠れるという技術を惜しみなく發揮して。自分に気取らせる程度の相手、仮に急に攻撃してきてもすぐ対応できる。そういう自信もあった。

こうやって夕べの自分を思い返すと、自分は武官として標準以上には優秀なんだなとしみじみ思う。他人に褒められたときに、「そんなことないよう」とか謙遜するのやめようかな。

もともと、褒められるのは大抵、単純な腕っ節ではなく部隊の運用なのだが。

「……と、いうわけですが」

小玉が説明し終わると、再びあたりには沈黙が漂う。しかし、一部で動きは再開された。とりあえず、責任者がそろりと立ち上がり、数歩引き下がる。それと同時に、若い女官と宦官たちがそっと耳を塞いだ。

次の瞬間、

「なにをやっておいでですか、あなたさまは!!」

梅花の怒号があたりに鳴り響いた。

先ほどの絶叫よりは控えめであったが、うっかり防衛行動を取り損ねた小玉には大して意味はなかった。

※

「それでお説教ですか」

「そう……皇后としての自覚が足りないって。でも豚の生首見ても保てる落ち着きって、皇后的には駄目じゃないと思うんだけど」

「うーん、それ以前の問題ですね」

ぞりぞりぞりぞり。

「そうね、まだ立后してから七日しか経ってないし」

「そういう問題でもないんですけどね」

ぞりぞりぞりぞり。

「でもずいぶん長かったですね、お説教」

「あー、そのまま色々と言われた『わたくしは豚の生首を高々と掲げる娘子を見て、心臓が止まるかと思いました。そのまま泉下に旅立ってしまったら、娘子はどうお思いですか』って。そこまで高々と持ち上げてないんだけど。胸のあたりで抱えてたんだけど」

「そこですか」

ぞりぞりぞりぞり。

「でもまあ、言われてちょっと申し訳ないって思った。確かにそういう死に方されたら、死人の尊厳を守りながらの説明、遺族にできないだろうなって思っ」

「そこですか……ってまあ、考えてみたら意外にそういう問題ですね」

ぞりぞりぞりぞり。

「で、そもそも皇后は朝起きて自分から寝台から降りるものじゃない。そのまま女官が来るのを待つものだってことを、いい加減に守ってくださいって」

「まあ、守るつもりはないんですよね？」

「なんでわかるの」

「普通、そういう皇后は、今やってるみたいなこと、しないからです」

ぞり。

「そう？」

小玉はかみそりを操る手を止めて、目の前の宦官を見た。楊清喜ようせいという彼とは、自分と皇帝と一緒に武官として働いていたときからのつきあいだ。それなりに信用できる人間でもある。小玉の後宮入りについていく、という理由で特に惚ほれてもない女のために自主的に去勢した奴が、人間的にどうなのかという点は無視するとして。

この青年は後宮入りする前、武官としての小玉の従卒だった。つまり本人もただの軍属であって、宦官ではなかった。それが小玉の後宮入り決定を知ると、そこについていくために勝手に去勢したのである。軍人から妃きさきになった小玉に匹敵するほど極端な職業変更である。なお、小玉としては完全に置いていくつもりだった。

確かにちょっとおかしいなとは思ったのだ。後宮に入るまでの準備期間に、常ならば勝手に手伝いはじめぬ奴が数日姿見せないなと。でも、こんな事態は想像できるわけがな

いし、これからも想像できない自分でありたい。

「そうです」

そんな信用はできるが（对小玉限定）、人間性には疑問が残る清喜が真顔で頷く。二人はしばらく無言で見つめ合った。その間に別の声がおずおずと響く。

「娘子、あの、生姜と葱……」

振り向くとそこには、最近厨房に入った見習いが申し訳なさそうに立っていた。

「あ、切り終わった？ 鍋に入れて」

小玉は毛をそり落とされ、すっかりつるんとした豚の頭を持ち上げた。心なしか可愛らしい。

「どう？ おいしそうじゃない？」

「よく食べる気になりますね、それ」

「だってこんなに肉付きいいのよ。食べないなんてもったいない」

うっとり微笑む小玉は、この豚の頭がなんのために自分の寝室の前に置かれていたかなど、考えようともしていなかった。そのままいそいそと大鍋に豚の頭を放り込む。

後宮には食事を作るための部署があるのだが、そこで作られたものは大抵冷めている上に毒味に毒味を重ねているため、まずい上に量が少ないという致命的な欠陥を持っている。したがって各宮には厨房が備わっていて、そこで信用のおける者に食事を作らせるという

のが常識であった。なお、たまに人選に失敗して毒殺される者もいるというのも常識である。致命的にまずい料理をとるか、あるいは文字どおりの意味で致命的になる可能性をはらむおいしい料理をとるか、難しいところである。

小玉としては別に冷たくてまずくても、人生の前半に食べた料理よりはおいしいし量も多いので、どこで作られたものでも別にいいのだが、彼女の場合、皇帝のはからいによって宮の厨房に人が手配されていた。余計なお世話……ではない。それによって小玉が苛立ちのはけ口として包丁を取ることのできるで、文句を言える筋合いではない。

もちろん普通は宮の女主人が厨房に立つことはめったにない。小玉がそれを許されているのは、皇帝が「それくらい好きにさせてやれ」と言っているからである。だから口うるさい女官の生きた見本である梅花も、それについては文句を言わない。

「……つきましては、大家へどうご説明いたしましょう」

大鍋をかき回している最中にやってきた警備責任者からの問いに、小玉は鍋をのぞき込んでいた顔を上げた。大家——皇帝への報告について、どうしようかとあまり考えることせず、小玉はさらりと返す。

「別にいいわ、豚の頭なんてたいしたことじゃないし」

「そういうわけにもいきません。それから、大事なのは豚の頭の価値云々ではございませ

んー……と小玉はなんともなしに斜め上を見ながら少し考え、言った。

「じゃあ、あたしから言っとくわ。近々、またここに来るだろうし」

「大家は本日の夕餉ゆづげの折においでになるそうです」

「あっ、そうなの？ しかも珍しく早いわね。じゃあ、その時に豚、出そうか」

「大家にですか!？」

彼がのけぞった瞬間、じゅわわわわわつという音を立てて鍋が噴きこぼれた。とんでもない勢いで。

「あっつー！」

「娘子、ご無事でするか!？」

「うわっ！ 火、火、弱火にして!」

「おい、水を持ってこい！ 娘子のお手を!」

「はい!」

複数の指示に、厨房の下働きたちがわらわらと寄ってくる。

そして紆余曲折まよまよせつせつ……というほどでもなく、単にとろ火で数時間煮込むことによって、豚の頭は無事食卓に上がった。

しかし、

「大家は本日遅くなるそうです」

「そうなの」

食べさせようと思った張本人が中々来ない。忙しい人間なので、仕方がないことではあるが。

「いかがなさいます？ 先に召し上がりますか?」

「いいわ、待つ。でも鴻こうは待てないよねー。もう寝る?」

腕に抱えた赤子をあやししながら小玉は言った。「えううう」というなんとも形容しがたい声を出して、鴻と言われた赤子は小玉の首にかかった首飾りを掴つかむ。待て、それはお前のおもちやではない。

小玉は慌てて赤子の手から首飾りを取りあげた。しっかりした作りなので壊れることはまずないが、間違つて石でも飲み込もうものなら大事になる。自分の首からも外し、目の前の卓上の、少し奥の方に置いた。

おもちやを奪われた赤子は怒りもせず、むしろ遊んでもらっているとでも思っているのか、きやつきやつと笑って小玉の胸元に懐いてきた。

微笑ましい母子の情景に見えるが、実は抱えている赤子は小玉の産んだ子ではない。だが、小玉の子ではある。ややこしいが、実際にそうなのだから仕方ない。皇帝の正妻になった七日前から、小玉は彼の子ども全員の嫡母となったからだ。ただ、皇帝の三男にあたるこの赤子に関しては、そうなる前から小玉が養育していた。

後宮の妃には位がある。皇后は別格として、四夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻というものである。上についている数字の分だけ、その階級の妃がいる。更にそれぞれの階級も細分化されており、それぞれに名前がついていて、ややこしいつたらない。

この皇子の生母の位は四夫人の一つである徳妃だ。彼女の名字は「安」なので安徳妃と呼ばれる……のだが、生前は一切呼ばれていない。皇子を産んだ功績で死後に昇格し、徳妃という位が追贈されたからだ。それまでは九嬪の筆頭である昭儀という位だった。

后妃の位の昇格や降格は結構あることで、事実小玉も九嬪の一つである充媛、四夫人の一つである賢妃という位を経て、皇后に至ったのである。着実な出世だが、本人は本意である。

安徳妃は小玉が宮中に入った直後に出産を迎え、まもなく亡くなった。小玉は彼女に一度くらいは会ったことがあるが、体つきは細いのにすごくお腹が大きかったこと、このお嬢さん、無事に産めるのかしらと心配になったことの記憶しかない。人となり以前に顔立ちすらもわかっていない。もちろん肖像画は残っているが、小玉は上流階級の人間の肖像画ほど信用できないものはないと思っっている。またもに見えていなかった。この前描かれた自分の肖像画は機会がなくても積極的に作って燃やしたいが、皇帝がしっかり管理しているのでそれができないのが目下の悩みだ。

ともあれ、生母亡き後、皇子の実質的な養育は乳母がするにしても、母親役は必要だということで、皇帝はそれを当時充媛だった小玉に頼んだ。そして小玉はそれをころよく引き受け、現在に至る。元々子どもは好きだし、昔は近所で生まれた赤子の子守をしていたこともあり、子育てに部分的に参加していた経験を持つ。だからそんなに手間がかかるとは思わなかったし、実際、乳母がいるため、小玉はこの子を育てることについて負担を覚えたことはない。むしろ、全然手をかけているつもりがないのに懐かれていることに、疑問を抱くくらいである。

乳母曰く、かなり気難しい子らしいが、小玉が彼の面倒を見ているときはそんなことを感じたことがないくらい、いつもご機嫌なのだ。なにがそんなに君の心の琴線に触れたんだい？ と聞きたいのだが、今のところ、

「まああー、だうつ、てあ、ばうう」

あたりの答えしか返ってこないことが明白なので、理由は年単位でわからないだろう。しかし最近、「あんまー」とか「ばうばう」とか、もう少しで意味のある言葉になりますね、惜しいですねというような発音もちらほらと聞けるようになってるので、そう遠い未来でもあるまい。ここはもう気長に待つしかない。

それに、懐かれて嫌な気持ちにはしない。会ったときから可愛いと思っただけになおさらだ。ただ、それは自分の息子のように可愛いという感情ではないが。

彼是小玉にとって知己である皇帝の息子でしかなく、要するに、彼の息子だから可愛い

——大事な友人の息子を可愛がっているのと同じ感覚だった。同じ理由で、彼の長男も次男も可愛い。こちらは存命している生母が可愛がらせてはくれないが。

まあでも、勝手な話だがこの子が構っていて一番楽しい。赤子の頃の皇帝を構っている気になるからだ。

もはや伝聞でしかわからない安徳妃は、外見からしていかにもな深窓の令嬢だったとのことだが、息子である鴻の顔からそれは読み取れない。顔を切り取って貼り付けたくらいの勢いで、父親にそっくりだからだ。まだ幼い三人兄弟の中、一番父親似なのは間違いなくこの子だった。

でも、中身はどうなるかなあと、小玉はぬるい笑みを浮かべる。少なくとも現在こんな小玉にべったりなあたりは、父親似ではないと思うのだが。

小玉は近くに待機していた乳母に問いかけた。

「ねえ、この子、寝そう？」

「今、娘ごうし子こが手放されたら、お泣きになるかと……」

とても困ったように乳母が言った。小玉も同じ見解である。いつになくご機嫌な今日の彼は、寝かしつけに入ったら、嫌がって泣くに違いない。

「今日はもうちょっとだけ、起きてようか。あんたはしばらくお父さんに会えてないから」
こしばらく、小玉のところへ皇帝が来るのは、赤子が熟睡する時間帯ばかりだった。

※

「遅かったね」

結局、皇帝が来たのはいつもどおり、夜更けになってからだった。とっくの昔に鴻は寝ていた。

とはいえ、小玉の言葉には嫌みが含まれていない。皇帝が見るからに疲れていたからだ。「本当に忙しそうね。色々あったんでしょ？」

小玉の口から出る言葉は相手に対する気安さを帯びている。そういう会話ができる関係は今でも保っている。でもどこか以前と違うという感覚もある。

対する皇帝の小玉に対する口調も昔と変わらない。

「ああ……少しな」

皇帝が疲労感を帯びた顔をややうつむかせて言う。いつそ毒々しいまでの美貌びぼうに影が落ちていつそう映える。

「そう」

少し「なに」があったのかは聞かない。聞くべき立場に小玉はいなかった。

「なにか食べた？」

「いや。つまめるものあるか？」

「豚の頭煮たのが残ってる。冷めてるけど」

「お前の宮にしては豪勢だな。それをくれ。お前は どうする？」

「あたし、お腹ふくれてるから、お酒だけもらう。温め直す？」

「いい。そのままくれ」

遠慮するでもなく、食事はすませてしまった。それはそうとう前からお互いの中で解
ずみのことだった。

酒を口に運びながら、小玉は笑う。

「今日、会えるかなと思って。けっこう起きてたのよ、鴻」

「そうか」

特に残念がるでもなく、皇帝が皿に取り分けられた肉を口に運ぶ。小玉はその態度に妙
にひっかかるところを覚える。彼は我が子に対してあまり情を示さない。それは三男に対
してのみではなく、長男や次男に対しても同様だ。

元からそういう人間であれば、多分気にならなかつただろう。だが、長いつきあいのあ
る小玉は、かつての彼が違う人間だったと感じていた。

わかつている。人は変わる。

自分だってすくなくとも立場は変わった——皇后に。

だが皇后という型に放り込まれた自分は、その型にぴったり合っていない自信がある。

それは、皇后の前に得た賢妃の位のと きも、充媛の位のと きも思っていたことだ。要する
に、後宮にすることが今の自分にとってしっくり来ない。

国益のためとか、臣下の立場としてだとか。

そう思ってから後宮に入った自分を今も否定はしていない。しかし、実際にこの場に自分
がいて、本当になにかの役に立っているのだろうか。自分ではまったくそう思えない。

「……ね、文林」

「なんだ？」

「あたしがさ、後宮に入って一年が経ったけどさ」

「ああ」

「それで、なにか、いいことってあった？」

小玉の唐突な質問に、彼は「どうした？」とは聞き返さなかつた。察しのいい男だ。箸はし
を置いて口を開く。

「……お前の言いたいことはわかる。はつきり言って、今はない。だが、これからのない
とはかぎらないだろう」

ずるいな、と思った。詳しいことはなにも言ってくれない。それでいて、そういう言
れ方をしたら、待つしかない。

「でもね、待機することってここでしかできないことなの？」

「なにか言いたい？」

「たくさん軍を率いることができるからって理由で、あたしがここに入った理由は本意だけで納得してる。軍の出番がないのも、あるよりずっといいことなんだとも思う。ただ、出番が来るまでここで……皇后でいる理由はあるの？」

後宮はとにかく金を食う場所だ。そこに皇后という最上位の女を据えれば、それだけで金はどんどん出て行く。その出費は皇后本人である小玉の望みとは関係がない。それは皇后という立場に支払われるものだからだ。

自分が皇后という立場に合っているならば、それでもいいのだろう。だがそうではない。そして、立場に合うとはどういうことなのかも見えてきていない。それを知りたい。

「……すぐに、結論が出るものでもないだろう」

だが、皇帝は答えてくれないのだ。

少なくとも、彼は皇后としての自分を役に立つと思っているのだろう。そうでなければ、昇格などさせない。そういう人間のはず、だ。

断定するののためらいを覚える。昔なら、「こいつはそういう考え方をする奴だ、以上！」で終わらせられた。そしてそれ以降は疑問を持たず、信じていられた。

でも、今は。

「寝るか」

箸を再度持つことはせず、皇帝は席を立つ。

「もういいの？」

「ああ。お前、明日は忙しいだろう」

「明日……ああ、あれ」

明日は確か、牡丹の鑑賞会という、字面からは優雅さだけしか感じ取れないような行事が予定されている。主催者は皇后——要するに小玉だが、好きで企画しているわけではもちろんない。

「お前はああいうの、精神的に疲れると思う」

「それもそうだな。寝よう」

小玉は真顔で頷いた。自分のそういうところは、多分永遠に変わらないと思う。

さっさと眠る支度を調べて二人同じ寝台に上がった。早々に寝息を立てる皇帝の気配を感じながら、小玉はぼんやりと昔のことを考えていた。

かつてこの男は自分の武官としての人生の半分以上を共にした存在だった。私的な関係でも友人として親しく、もしかしたら結婚するかもしれないと思っていた相手だ。別に恋

をしていたわけではなく、もし相手がいなかったらこいつかなーというくらいに消極的な関係であったものの。

結果的に自分はこの男の妻となっているので、見ようによってはめでたしめでたしなのだろう。だが、そこに至るまでの道筋が、当初想定していたものと全然違う。

まず相手がいきなり皇帝になってしまった。いきさつについてはまだ聞けていない。そこからへんのことを追及したら、おそらく時間がとられそうなので、いつかゆっくり話を聞きたいと思っている。

とりあえずその時点で、この男とどうこうなる未来は完全にないものとして小玉の中で処理された。だから、結果的にこの男の妻になったとしても、男女の関係が発生するわけもない。現状のように皇后の宮に来て、なにもせずに熟睡しているという、普通の皇帝としては「お前なにしにきたんだ」的な状態も、自分と彼の関係においてはアリなのである。むしろそれ以外がナシだ。

三年間、離れていた。

お互いの立場も昔とは違う。

かつてはまがりなりにも上官と副官だった。それが今では皇帝と皇后だ。

だからこの男が変わったとしても、あるいは変わったと感じているだけだとしても、それはむしろ当然のことなのだ。自分自身、この男に対する情は変化している。今、自分た

ちはこんな風と同じ寝台に入ったとしても性的な関係にはならないし、そのことに疑問を持たない。

だが、そのこと自体にもやもやとするものを覚える。

まがりなりにも、かつては結婚を視野に入れたことがある相手に対して、そこまで割り切ることのできる自分とはなんだろう。吹っ切ったとも違う。そもそも、そういう自分だったのだろうか。

きっと自分も変わった。でもどう変わったか、自分でもよくわかっていない。そしてこれから望まれる形に変わっていかねければならない。それでいてどうあることを望まれているのかも見えない。

——だめ、今これ以上考えて結論を出そうとするのはまずい。

小玉は自分が煮えていることを強く意識して思考の対象をそらそうとした。煮えているといえは……あつ、そういうえは今日煮た豚。

努力の結果、今朝の豚の生首の件を、まだ皇帝に言っていないことを思い出してしまった。

「……………」

どうしよう。

そろりと皇帝のほうを見やる。よく寝ている。そして確実に疲れている。ややあつて、小玉はうんと頷き、自分も寝る体勢に入った。起こすのは忍びないし、なんだかんだいってしよせんただの豚の首である。おいしかった。それだけでいいではないか。

彼女はそう結論づけた。

もちろん、それでいいわけがないのだが。

※

翌日は見事な快晴だった。洗濯をするのに最適な日だが、今や小玉はそれをしない——させてもらえない身分だ。代わりになにをしているのかというところ、

「まあ、見事な花ぶりですこと」

ぱっちり着飾って牡丹の花の間をそぞろ歩いてる。

花を眺めながら女たちが笑いさざめく。その光景は牡丹に負けず劣らず華やかだ。美しい花も美しい女も、たくさんいれば同じ「妍を競う」という表現が使われるのが納得できる。

後宮の華麗三千——その中でも特に美しい上位の妃嬪たちが、この場に集まっていた。

その頂点に立つ皇后が自分というのが、悪い冗談としか思えない。そしてこの会の主催者が自分だということも。

これは小玉が皇后になってから初めて行われる、妃嬪たちを交えた行事であった。

たかが花。されど花。

「皇后としての威信がかかっております！」

と、小玉より気合を入れていたのは、最近本人は心臓が、第三者は脳の血管が心配な古参の女官・梅花である。彼女は小玉の左後ろにびったりとくっついて、色々と不慣れな小玉の補佐をしている。ありがたい。だが、当事者としては「なにかやらかさないかしつかり見張っている」という認識だろう。彼女の神経をぎりぎり削っていることについて、自覚はしている。いつもごめんなさい。おかげであんまり心配せず場に臨んでいます。

ただ、小玉の名誉のために補足しておくが、彼女は決してなにもしていないわけではない。これまたそうとう心配したのであろう皇帝が直々に作つた実施要領を、すべて頭の中にたたき込んでいる。

気を抜くと大腿で歩きそうになるのをおさえつつ、妃嬪たちを引き連れて、牡丹の咲く道をしずしずと歩く。時々立ち止まって花を引き寄せてのぞき込んだり、香りをかいだりする。

「いい香り」

この場にいる誰よりも鑑賞する意味で牡丹に興味を持っていない自信はあるが、素敵なものを素敵だと思うぐらいの感受性は持ち合わせているつもりだ。それ以外では、「牡丹って根っこが薬になるんだよなあ……なんの薬だったっけ」ということぐらいしか考えていないが。

「本当にそうですわね。娘^{じょうし}の立后をお祝いしているかのよう」

小玉の言葉に、すぐ後ろについていた妃^{きさき}の一人が相づちを打つ。四夫人^{よしじん}の一つである淑妃の位を賜っている彼女は、もちろん本心から言葉を発してはいない。だってこの子、目が笑っていない。

子というほど、小玉と彼女との年齢差は大きい。母娘^{ははな}ほどというのをぎりぎりのところまでまぬがれているが、確実に叔母^{おば}と姪^{めい}ほどには離れている。そんな彼女は、ある側面では小玉が皇后になる原因を作った娘でもある。

小玉が後宮に入ってから以来、この淑妃はことあるごとに小玉をよびつけては雑用をさせた。嫌みを言ったりと、とても明快に小玉のことを嫌っていた。それは別にいい。小玉としては非常にわかりやすいので適当に相手をしてきた。むしろ、同じ四夫人でも、いつもおっとりとした笑顔を浮かべて言葉少なにしている貴妃のほうが、よほど感情を読めない。だが、淑妃に小玉がかまけるのは時間の無駄だと断じた皇帝が、嫌がらせをされない立

場に小玉を据えた。要するに位を昇格したのである。正直、この男の合理的な面があればとむかついたことはない。

しかしその結果、淑妃も痛い目をみた。皇帝の長男を産んだ彼女は、后^{きさき}がねとして扱われていたし、本人もあからさまにそう思っていた。小玉も「この子が皇后になるんだろうなあ」と思っていたくらいなのだから、小玉の立后は彼女の誇りに致命傷とまではいえないが、複雑骨折^{ふくざつこつ}くらい痛い痛手を与えたのではないだろうか。

あれだ、あれ。

いじめたらあんな、なんらかの形で自分にその報いが返ってくるんだよ。

小玉は彼女を見る度に、各ご家庭でお母さんとかおばあちゃんあたりが、小さな子どもによく言い聞かせそうなことを思い浮かべる。とばっちりでこつちも被害甚大なんだが、どうしてくれる。

内心をのぞき込んだら、悪い方面での語彙^{ごい}が増えそうなことを間違いないという思いを押し隠し、につこりと微笑む淑妃は、公私の弁別をそれなりにわかまえているという点では大した自制心の持ち主である。その点は手放しですごいと小玉は思う。こういう自制ができない子だと思っていたのだが、意外に偉い。

「わたくしもぜひあやかりたいものですわ」

彼女はその芸術品のように形よく細い指で、近くに咲いていた黄色の牡丹を摘もうとした。その時、周囲からはっと息をのむ音が聞こえたが、小玉はそれを全然気にしなかった。それより気になることがあったのだ。

小玉はそっと彼女の手を押しとどめた。

「それは、あなたには似合わないと思います」

彼女の驚愕を浮かべた顔は気にもとめず、小玉は自身のすぐ近くにある青い牡丹の花をつみとって、彼女の髪に挿した。

「ほら、これなど珍しい色合いで花ぶりもよく、淑妃……に似合っていますよ」

うっかり位の後に「さま」とつけそうになって——いやほら、先日まで位が下だったから——やや慌てる気持ちを押し隠しながら、小玉はにっこりと笑ってみせた。

全力で維持した笑顔もひきつる頃、ひとしきり花を見た後で茶を飲んで解散し、小玉は自分の宮で椅子にどっかりと座り込んだ。肺のすべての空気をはき出すようなため息を吐く。

「つつかれたわー……」

今考えていることはその一点だけである。もう今すぐにでもこの格好から解放されたい。とりあえず頭からかんざしをひよいひよい抜いて卓上に置く。いつもだったら渋い顔をするであろう梅花もとがめたりはしない。それどころか、

「よくおやりになりました、娘子」

満面に喜色をたたえて、小玉を褒め始めた。

「そう？」

褒められて悪い気はしない。小玉は軽くなった頭をかき混ぜながら聞き返す。

「はい。特に淑妃が牡丹をお摘みになろうとした時……」

「ああ、あれ？ やつぱり、お姉さんとして着こなしに気を配ってあげるべきだと思って」黄色い花は淑妃の今日の衣装には似合わなかった。青系統で固めていたから、やはりこは青の花だと思ったのだ。幸い、近くに青い牡丹の株があってよかった。珍しい花なので、園丁には申し訳ないが。

「でもやつぱりおせっかいだったかな……って、どうしたの？」

相づちのない梅花を不審に思っ顔をのぞき込むと、完全に魂が抜けた表情になっていて、見ている側が驚いた。

「梅花、天に召されてない!？」

「いえ、幸いまだ……今召されるかと思いましたが……むしろ召されたほうが幸せだった

「かもしれませぬが……」

なに言っただんだこのおばちゃん。

心臓をおさえてあえぐように言う梅花を、小玉は慌てて支えた。

「なにかあった!? あたし、なにかした!?」

「いえ、今日に関してだけは娘子は悪くはありません」

今日限定かいと思いつつ、とりあえず小玉は侍医を呼ぶことにした。

※

「……ということがございました」

梅花の報告はここで終わった。

ゆっくりと——本当にゆっくりと文林は頭を抱えた。

「あの女は……本当にきわどい女だな……」

「まさしく」

頷く梅花も顔色が悪い。つい先日のことをありありと思い出しているのだろう。その時に彼女の肝がどれくらい冷えたかは文林にはたやすく想像がつく。

鑑賞会の時、淑妃が「皇后にあやかりたい」と言っただけで、皇帝と皇后にのみ許された禁色

の牡丹を摘もうとした。それは、皇后に成り代わってやるという意志を表明したということに他ならない。そのまま摘ませれば、後宮内での皇后の権威は地に落ちる。だが同時に、下手なことを言っただけでそれを阻めば、たかが牡丹のことで器が小さいと責める名分ができてしまうという、なりたての皇后にとっては非常に危うい事態だった。

しかし皇后は淑妃に対して青い牡丹を与えた。それは表向きの面でも、裏向きの面でも申し分ない対処だった。淑妃の名は「若青^{じやくせい}」という。皇后がありふれた牡丹ではなく、淑妃の名に含まれた色の、しかも極めて珍しい牡丹を賜ったというのは、表向き皇后の温情を示す。だが同時に青は未熟という意味を持つ。したがって裏向きの意味で皇后は淑妃に「お前みたいな小娘に皇后位は渡さない」と高らかに宣言したのである。もちろん本人は意識などしているわけがない。馬鹿という評価からほど遠いが、あれはそういう面で頭が回る女ではないと、文林はいやというほどよく知っている。

「しかし、淑妃もあさはかなことだ」

立后したての皇后に宣戦布告。それはその皇后を立てた皇帝に反感があるとみなされてもおかしくはない。おそらく彼女の父親はこの話を耳にして、今頃さぞや慌てているだろうが、それは甘やかして育てた彼が悪いのだ。

「まだお若いということもあるのでしょうか……」

梅花の言葉に、文林はふんと鼻を鳴らした。

「若さが関係あるか。小玉はあの年頃にはすでに数十人の兵を率いていた」
 「大家。それは引き合いに出す例としては、花と鍋なべくらい極端です……ともかく、大家、奏したき由がございます」

「……言え」

指摘しながらもさらりと流す梅花に、内心釈然としない思いを抱えながらも、文林は彼女の言葉の先を促す。

「おそれながら、この度のようなことは、そう何度も起こりえないかと……あの方のことなので、今後何度でも運と要領のよさでなんとかなさそうな気はいたしますが、そうであつたとしても期待しないほうが得策かと存じます」

「ああ、言いたいことはわかる」

「大家。娘子は決して愚鈍とはいえぬお方です。一見ひねくれているようで素直なお方でもございます。こう何度も初歩的なことで失敗していらつしゃるのは、単純にこの世界での知識が足りないだけかと……そしてそれは娘子の責任ではございません」

文化とは文脈を持つている。読む前に一定の知識を身につけていなければ、正しく読み取れないという点で。皇后はまさに今その一定の知識を身につけていない状態だった。

しかし、望んでこの文化に飛び込んだわけではない彼女が、それらのことを身につけていないのは無理もないことだ。

「……ああ、そのこともわかる」

齒切れ悪く文林は同意した。誰が悪いかといえば、それは文林に他ならない。彼女に知識を得る機会を与えず、またそれを承知の上で皇后に立ててしまった。

それはひとえに、自分にとって都合がよかったからという、極めて勝手な理由だ。

「先日までの、賢妃けいひの位あたりならばそれでもなんとかなりました。娘子はその点、控えめに過あやごしておいででしたから。ですが今は国母であらせられる……知らぬ存ぞぬでは通りませぬ。そのことに娘子も近いうちに気づかれるかと」

「そうだな」

その時彼女は文林を責めたりせず、ただ静かに割り切るだろう。この男はそういう面では頼りにならないのだと。

「近日中に手は打つ」

「なにとぞよしなに」

梅花は深々と一礼した。

「それから、あの、大家、差し出がましゅうございますが……」

去るかと思いきや、梅花は再び言葉を紡ぎ出した。かなり躊躇ちゆうちゆうしながら。

「なんだ？」

「わかつております。わたくしも、容色がお好みで娘子をお迎えになったのではないとい

うことを。ですから大家が娘子に手をおつけにならないのだと。ですが、娘子はご実家の後ろ盾をお持ちにならぬ身……失礼ではございますがご高齢ですし……」

文林は軽く眉をひそめた。これが彼女以外の口から出るのであれば、本当に彼女の言うとおり差し出がましいと思うところであった。

「要するに早く子を産ませろと言いたいんだろう」

「御意」

そしておそらくは、「子を産ませないのであればなぜ皇后にしたのだ」とも言いたいのだろう。実をいうと、皇后にしなくとも、彼女がもう少し楽に後宮で嫌がらせを受けないようにすることはできた。ただ、彼女が自分よりはるかに若く未熟な娘たちに頭を下げる姿は見るに堪えなかつたし、どうせ上位に据えるのなら頂点に据えたかつた。

だから立后は文林のわがままによるものである。そのことを自分と梅花はよく知っている。皇后もいざれ知恵をつけたならばそのあたりのことを理解してしまうはずだ。その時、彼女は自分を責めるだろうか。

「もう下がれ。皇后への教育の件については、案ずるな」

文林はその件についてなにも返事をしなかつた。梅花はそのことについて追及はせず、下げた頭を、更に深々と床に近づけた。

梅花が去つたのを見届け、文林は煙管キセルを手にとつた。彼女が来るまで吸っていたそれは、

まだ火種が残っている。

深く吸い込む。

紫煙が文林の視界を部分的に染めるのを、ぼんやりと見る。

我知らず眩くらきが漏れた。

「子ね……」

今のところ三人いる我が子のどれも、可愛いとは思えない。あえていえば皇后に養育されている三男に一番関心を持っているが、多分それは彼女が育てているからであつて、三男の個性とはまるで関係がない。

——彼女が自分の子を産んだら、どうなるだろうか。

そう思ったところで文林は苦笑して、煙管をひっくり返して中身を捨てた。詮せんないことを考えたものだ。いまさら夢想しても仕方がないことなのだ。